

近代語におけるマ行とバ行の交替現象の變化再訪

* OKADA Kazuhiro

二〇一〇年六月一六日

○はじめに

（一・〇）

『源氏清濁』(京大本) 一才 「おほゝし」
も本

(○・1)

『源氏清濁』三才「なまうかひ」_ミ₁

(三〇)

子カ工カ
六日
モエ又ヤミハ
ア

『源氏清濁』六才
「五六日イツカムユカ（ムユカトモ
ムイカトモキコエヌヤウニヨムガ可然歟）」

(〇・一)に「ほ」に「も」とあるのは、註記としては「も」である傳本の存在を示したものであるが、(〇・二)はしからず、(〇・三)のごとき、特殊な読み方の指南である。かかる指南を「讀み癖」と稱する。「ムユカトモムイカトモキコエヤウニヨムガ可然歟」などといふ、およそ理解しがい指示からも知られるとほり、容易に奥義に達しがい、そんな性質のものであるが、こんなものが江戸期初頭に編まれてゐた(遠藤一九八九)。

(〇・一)については該當箇所が多すぎるが、(〇・二)については現行の『源氏物語』ではただ一箇所であるので、引いておく。

(○・四) 濁りにしめるほどよりも、なま浮かびにては、かへりて悪しき道にも漂ひぬ
べくぞおぼゆる。
(新編古典全集本・巻一、帚木、六七ページ)

ここから、(〇・二)の指圖は、「び」が「み」になるといふものであつたことが分る。ここではたんに讀み方の指示にすぎないが、中古の和文を學ぶものたちにとって、このことはそれなりに問題

* Graduate School of Letters, Hokkaido University, Correspondence: oo.kzhr@gmail.com, Twitter ID: kzhr
この資料は、Twitter 第二回札幌言語学ミーティングでのペーパーとしてではなく、この問題の議論のための資料として配布するものである。

1 聲點がつぎのやうに附されてゐる「上上平なしなし」。

であった。ころみに同時代の『和字正濫鈔』（契沖、元禄八刊、いま岩波全集本による）をひもとけば、「むとふとかよふ類」から「みにまかふひ」まで六類四十三例が掲げられてゐる。巻五の一部に掲げられたこれらは、とはいへ、かれらにとつてもおほきなテーマであつたハ行轉呼に比べて、格段におとるあつかひだし、出典が挙げられたものも十二例に過ぎないのではある。²

これは本義的には日本語史上における音韻的な現象であつたのだが、古人が、いくつかの語について、いま自分たちが讀むとほりに書いてゐないといふことは、家には奥義を、和學者たちには假名遣上の問題を與へた（迫野二〇〇五・一五三ページ）。迫野二〇〇五によると、日本語史上には $/m/$ から $/b/$ 、 $/b/$ から $/m/$ への二回の交替現象があり、一度めにはかかる問題にならなかつた變化が二度めには問題を引き起したといふ。これはいったいなぜであらうか？

〇・一 本發表の目標

本發表では、假名遣史と音韻史の接點としての興味から、とくに問題となる二回めについて中心にこの現象を考へてゆきたい。いま、兩方に立ち入るのは遠大にすぎるので、いまは音韻史の側から眺めてみることにする。

副題にいふ近代語とは、政治史における室町時代の日本語から現代の日本語を指す用語であるが、ここに見てゆく音韻史、わけても清濁史において、近代語の時代は、古代語に存するとされる濁音の前鼻音が衰微する過程と考へることができる。

清濁の歴史において、管見のかぎり、現在の學界にはふたつの説があるやうである。ひとつには主流説の現代標準語のごとき清濁の關係を基本とし、なほかつ濁音に前鼻音があつたとするもの、いまひとつには、古代語の語中尾はすべて有聲音であつたと捉へ、そのなかで清濁を分つものが前鼻音の有無であつたとするものである。

〇・二 古代語の清濁について

近代語初期の清濁を考へるために、まづ古代語の清濁のありやうについての議論を瞥見しておく。以下の議論は、高山一九九二、肥爪二〇〇〇、Ohno 2005 に多くを負ひ、有聲音説については Hamano 2000 も参照してゐる。

まづ、清濁は古今を通じて破裂音ないし破擦音、摩擦音などの阻碍音にのみ起きることを確認しておく。すなはち、マ行やナ行、あるいはラ行やア行には濁音はない。

また、清濁に關して、それが韻律的 prosodic な區別であるといふ議論がある（高山一九九二・四五―四九ページ、Ohno, 2005, p. 59）。この觀點では、アクセント同様、語に對して濁音の位置が指定されると捉へる。この觀點の利點は假名文において濁音がまれにしか表記されなかつたことをよく説明することである。

² 現に搖れつゝあつたことは、「舐 ふもし ぬふる むといふ人もあり」（『和字正濫鈔』卷五、全集二五九ページ）といふ註記にも何へるし、「訪 上のふもし、むに似たり」（同前、二五九ページ）などといふ『源氏清濁』に似た註記もある。なほ、ここでは語彙の規模として問題にしてゐるのではないことを附言しておく。

〇・二・一 有聲音説

現代語の體系では、清濁音は大枠として有聲・無聲の對立である。³そこから推して、古代語はより整然とした體系を有してゐただらうとするのが有聲音説である。

現代の東北方言の觀察や、十五から十六世紀にかけてのキリシタン資料の検討などから、古代語では、古代語の濁音は、單なる有聲音ではなく前鼻音を伴ったものとされてゐる。この觀點では、前鼻音は（認められることが多いけれども）あつてもなくとも構はないものであり（Ohno, 2005, p. 57 and fn. 39-44, Yamane-Tanaka, 2005, pp. 140-142）⁴ ヲミテ>オンデのいとき變化において、濁音化させる力が鼻音にあるのは、それは鼻音が後續音を有聲化させやすいことにあるとされた（高山一九九二・一九二〇ページ）。

この觀點では、一般に、上代語に前鼻音をつよく認めないことがあるが（遠藤一九八九・三一ページ）、平安から鎌倉にかけて現れ、そして現代にかけて衰微したとされる。前田二〇〇五によれば、（前鼻音を上代から認めたうへで）/ᵐb/ > /ᵐd/ > /ᵐ/ > /ᵐg/ の順に衰微したといふ。

〇・二・二 鼻音説

有聲音説に對して、鼻音説では古代語の清濁の辯別を擔つてゐたものを前鼻音の有無と推定する。この措定により、清濁の問題から有聲性が取り除かれる。この觀點では、東北方言の現在の體系は祖型に似た體系といふことになる；すなはち、語中尾の清音は有聲化しやすい。この觀點では、いはゆるハ行轉呼や音便が摩擦性の退化といふ觀點で統一的に説明できることになる。⁴

この觀點では、キリシタン資料以前のいづれかの時點において、鼻音・非鼻音でない體系へと舵取りしたこととなる。Hamano (2000) によれば、撥音の受容により、撥音と濁音の前鼻音と明確に區別するために濁音の前鼻音が落ち始めたといふ。

一 先行研究

先行研究は數多くあるが、今回は、土井一九六三、松本一九六二、一九六五、山口一九八三だけを取り上げる。

一・一 土井一九六三

土井一九六三は、この現象の背後について、金田一春彦一九五三の見解によつてゐる。土井一九六三の圖解に基づいて金田一の説をまとめると圖 1 のごとくになる（一部改編）。

土井一九六三は、基本的に現象の解釋としては金田一一九五三に従ひ、主眼としては「ゆれ」の實相にある。

³ ただし、現代においても、清音の有聲化が濁音化であるわけではない。たとへば、ハ行をそのまま有聲化してもバ行は得られないし、むしろ、ハ行の異音と解釋される。肥爪二〇〇〇参照。

⁴ いまここにくわしく觸れる餘地がないが、高山一九九二の「濁り要素」と Kuroda (2002) の議論とは、あひ補ふ關係にあるのではないかと考へてゐる。Kuroda (2002) の理解について佐藤直人氏の二指摘により表現を改めた。

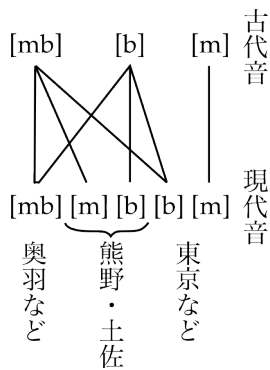


図1 土井一九六三・一〇八に基づく金田一九五三の説

一・二 松本一九六二

松本一九六二は、キリシタン資料、とくに『平家の物語』・『エソポのファブラス』と『日ポ辞書』の対照を行ったものである。その結果、當時は類似した語形として、規範的にはバ行にいふもの、マ行にいふものの複数の発音があるものがあつたが、ほぼ口頭語にはマ行と解されるべきこと、語によつてはバ行に固定したものがあつたことを示した。末尾に、濁音における前鼻音との関係を示唆してゐる。

一・三 松本一九六五

松本一九六五を承けて、古代語から近代語までの史的なマ行・バ行交替現象について扱つたものである。まとめを抜萃する。

- 1 従来 b・m 音の交替とされてきた現象のうち、動詞語尾での交替は、音韻変化と言ふよりはむしろ形態変化というべきものではないか。
- 2 まず奈良時代から平安時代にかけて m v b の変化が起り、つぎに院政期から鎌倉期にかけて、まったく別の語に b v m の変化が起る。
- 3 右の第一の変化は母音 a の音節に多く起り、第二の変化は u の音節に起ること。また、第一の変化のうち u・o 母音の音節に起つたものは、ふたたび第二の変化に加わつて再変化すること。

第一の變化、第二の變化といふのは説明を要するだらう。第一の變化とは、平安頃に $mb \rightarrow m$ 化したことを言ひ、

(一・一) 思麻良久は寝つつもあらむを

(萬葉一四・三四七二)

(一・二) 「侍 サブラヒ」

(色葉字類抄)

などであつて、(一・二) の語はふたたび $q \rightarrow m$ が起つて、

(一・二 b) 「侍 サムライ」

(運歩色葉)

のごとき例が見られる(こののちもサブラヒは出て来るが)。

一・四 山口一九八三

山口一九八三はおもに古代語について調べたものである。結論を抜萃する。

1 古代における m—b 間の交替は、上代にすでに例があるが、それらを通覧すると、九五〇年あたりまでは専ら mvb の例であるが、その後 bvm の例も現れるようになる。

2 この交替は、n—d 間の交替に比してきわめて例が多く、また、初め bvm がなく、mvb のみが起こったことからして、単に両子音の音声的な近さというだけでは説明できない。ハ行子音が「p[v]φ」の変化を生じたことにより、ハ行子音とバ行子音との緊密な対応が弱まり、その分だけバ行子音とマ行子音とが接近して感ぜられたことによるものと思われる。

3 mvb は当該音節の前後に力行音・タ行音がある場合、その破裂性に同化されて、m が b に転じたと思われる例があるが、それだけでは説明できない。m を b に転ずることにより、強調形を作り出したものと解される例が少なくない。

4 九五〇年を過ぎたころになると、bvm の例が現れるが、これは、mvb の語例がかなりの数に達する段階になると、もともと b 形であった語についても、本来は m 形だったかのような意識が生じ、そのため新たに m 形が作り出されることがあったものと解される。

(一六一—一六二ページ)

二 鎌倉から室町期におけるバ行・マ行の「交替」

二・一 契沖の記録

読み癖の代表例として契沖のものをしておく(註は省いた)。さきに引用した二例も参照のこと。

- | | | |
|--------|-----------|------------|
| (二・一) | 三郎 さふらう | (むとふとかよふ類) |
| (二・二) | 候 さふらふ | (ふともとかよふ類) |
| (二・三) | 上達部 かんたちめ | |
| (二・四) | 采女 うねへ | |
| (二・五) | 馬並而 うまなへて | |
| (二・六) | 並 なへに | (めと聞ゆるへもし) |
| (二・七) | 浮 うかへ | |
| (二・八) | 葬 はうふる | |
| (二・九) | 弔 とふらふ | |
| (二・一〇) | 冠 かうふり | (むにまかふふ) |
| (二・一一) | 弊 いなひ | |
| (二・一二) | 悲 かなしひ | |
| (二・一三) | 楽 たのしひ | (みにまかふひ) |

二・二 キリシタン文獻における實態

以下の用例は、ほぼ松本一九六二に依據してゐる。

(二・一四) *Vsobuqi, qu, buita.* 軽く息を吹く。

(日ポ辞書(以下『邦訳日葡辞書』による))

Vsomuqi, qu, uita. Vsobuqi, qu, uita. と書かれる。(日ポ辞書補遺)

(二・一五) *Catabuqe, ru.* *Catamuge, uru* の条を見よ。なぜなら、B 字を用いて

〔*Catabuqe, ru* と〕書かれるけれども、話し言葉では M を以て〔*Catamuge, ru* と〕発音されるからである。

Catamuge, ru, eta. 傾斜させる。(日ポ辞書)

(二・一六 a) 何でもあれかし^{トハ}とは一つもなうて、

(エソポのフアブラス、角川文庫本による)

(b) *Tomoxij. Toboxij* に同じ。貧しくて欠乏している(こと)。(日ポ辞

書補遺)

(c) 乏^{トハシキハナ}者の訴は水をもて石に投ぐるに似たり

(日本書紀・推古二年四月(圖書寮本訓))

(二・一七 a) *Saiquõ ua ... muchi uo vte,* (平家の物語・二五ページ)

(b) *Aruiua coma ni muchi uo vtçu fito mo ari, ...*

(平家の物語・一九三ページ)

(c) *Yajirõ toyû monoga ..., amarino mezanaxisani caini cõta vxino ychimot nani monuo deõto xita toqi, buchi uo fitotçu atetareba, ...*

(平家の物語・二〇七ページ)

(d) *Yoshitçune amari fucairiuo saxerarete, ... buchino saqide caqiyoxe*

(天草の物語・三三八ページ)

caqiyoxe, ...

(二・一四、一五)について、とくに『日ポ辞書』において、假名をそのままローマ字轉寫したやうな痕跡が指摘されてゐることを想起させる(當時の實用といふ觀點からも興味深い)。

三 議論

つぎのやうに議論ができよう。

● 上代から平安期におけるマ行からバ行への變化は、唇音の鼻音がもつとも退潮しやすかつたとすればさほど不思議ではないが、語中の濁音を増やすこととなり、ライマンの法則には違反しやすくなる。しかるに、文獻に見えるかたちは、ライマンの法則を破る變化はほばない。山口一九八三にバ行音化によつて強調形を作つたかとされる例があるのを鑑みるに、濁音はかなりつよい存在であつたかとさへ思はれる。

● かへつて、バ行からマ行への變化は、バ行の前鼻音の〈ゆるみ〉——松本一九六二が示唆するやうに——が關はつてゐさうである。現象としては、前鼻音が他の濁音の前鼻音に先行して脱落したバ行において、濁音の成分の、阻碍音が濁りのどちらかが脱落したと見ることもできる。

⁶ 土井一九六三・一〇八にわずかに觸れてあるほか、松本一九六五・六四に將來の課題として擧げられてゐる。

假名遣や読み癖の問題を考へるのには、といふよりも、この問題の探求それじしんまだ不十分ですらないところみではあるが、濁音史におけるこの問題の意義を示し得たことを願ふ。かく提起して稿を閉ぢる。

参考文献

- [1] 土井洋一 一九六三 「音韻交替についての一解釈(上) バ・マ行の〈ゆれ〉をめぐる」『研究年報』一〇 一〇三ー一二三
- [2] 遠藤邦基 一九八九 『国語表現と音韻現象』新典社
- [3] Hamano, S. 2000. Voicing of obstruents in old Japanese: Evidence from the sound-symbolic stratum. *Journal of East Asian Linguistics* 9, 207-225.
- [4] 早田輝洋 一九七七 「生成アクセント論」大野晋・柴田武(編)『岩波講座日本語5 (三三三三三六〇ページ)』岩波書店
- [5] 肥爪周二 二〇〇〇 「日本韻学用語攷(1) 清濁」『茨城大学人文学部紀要』三三 一七二八
- [6] 肥爪周二 二〇〇二 「ハ行子音をめぐる四種の「有声化」」『茨城大学人文学部紀要』三七 九七ー一一八
- [7] Kuroda, SY. 2002. Rendaku. In N. Akatsuka, & S. Strauss (Eds.), *Japanese/Korean Linguistics Volume 10* (pp. 337-350). Stanford: CSLI Publications.
- [8] 松本宙 一九六二 「ギリシタンローマ字資料におけるマ行音バ行音交替現象の実態」『文芸研究』四二 四七ー五八
- [9] 松本宙 一九六五 「マ行音バ行音交替現象の傾向」『国語学研究』五 五二ー六五
- [10] Ohno, K. 2005. *Sei-daku: diachronic developments in the writing system*. In van de Weijer, Nanjo, & Nishihara, 2005 (pp. 47-69).
- [11] 迫野虔徳 二〇〇五 「仮名遣いの発生と展開」林史典(編)『朝倉日本語講座2 (第七章)』朝倉書店
- [12] 高山倫明 一九九二 「清濁小考」田島毓堂・丹波一彌(編)『日本語論究2 (一七ー五六ページ)』和泉書院.
- [13] van de Weijer, J., Nanjo, K., & Nishihara, T. (Eds.). 2005. *Voicing in Japanese*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- [14] 山口佳紀 一九八三 「古代語におけるn-r間の交替について」『金田一春彦博士古稀記念論文集第一巻 (一二九ー一六二ページ)』三省堂
- [15] Yamane-Tanaka, N. 2005. The implicational distribution of prenasalized stops in Japanese. In van de Weijer, Nanjo, & Nishihara, 2005 (pp. 123-156).